岡藩に於ける心学の概要

——広徳舎の沿革——

北村清士

嘉永二年藩士の服部小平太は、江戸の参前舎（心理学の塾、中沢道二の創立したもの）に中村徳水先生を訪ふて、心学入門の手続を了した。之の服部の勧誘で同藩の阿南与平次、広瀬定吉、田代敬策の三名も亦入門することとなつた。嘉永四年九月、府内藩松平侯の家臣、阿部容斎、岩田与兵衛等の招請で、中村徳水先生の府内に巡講するに当り、岡藩の右三氏は、好機逸す可らずと協議して、是非岡城下に来ることを要請した。中村先生は、之を快諾されて、九月八日竹田へ来り赤阪の広瀬弁左衛門宅へ止宿した。依つて竹田町字西浦丁の正覚寺を講席として、九月九日から十七日まで九日間、講話があつて入門者が三百名にも及んだ。其の時入門者名簿も作成されて之を石田先生入門譜（石田先生とは心学の祖、梅巌先生）と称呼した。先生は十九日再び府内へ向け出発された。

嘉永五年二月廿日、中村先生は再び竹田へやつて来た。そして三月十三日まで竹田に於て講話があつたが二度目の来岡なので、前回以上の盛況を呈した。三月十九日からは各村に出張されて巡回講話が始つた。この講演は五月八日まで五十日間連続されたが文字通り東奔西走の活動でその成果も亦大であつた。五月九日より廿五日までは竹田町に帰られ、主として岡藩士の重臣を対象としてその啓蒙にあたつたのである。

中村先生は五月廿五日竹田を後に熊本の巡講に出発された。

斯くして岡藩の心学熱は日と共に高まつた。嘉永五年十月六日、大阪の岡藩蔵屋敷に於ても、中村先生を特に召じて五日間講演が開かれた。嘉永六年一月廿九日、中村先生は厳寒中、積雪を蹴つて三度、我が竹田町へ来遊され四月三十日まで約三ケ

月と云ふ長期に亘つての、講話が実施された。その時は村落を対象として巡回講話があり、入田、次倉、原尻、市用、米納でも開莚があり聴衆は超満員であつた。湯原を最後に五月一日竹田の城下に帰着し、道話、会輔、修行等が実施された。

以上三度目に亘つて中村先生の来岡、庶民の啓蒙は、顕著な成果を挙げられたが、之に対し岡藩の儒学者は白眼視してゐた。然し藩主中川久昭公は之に多くの便宜を与へ大庄屋へ対して開講の御触れを出して勧奨した程である。

中村先生は五月廿五日府内へ出発した。安政元年七月十七日竹田心学の同志、服部、阿南、広瀬等の発議で竹田町下木、小泉邸に道話を開き家老を始め藩士の重なものが残らず出席した頗る盛況を極めた。

別に安政元年七月、江戸藩邸に於て中村徳水を招請して講話があつた（期間不明）。

以上の如く岡藩に於ける心学は年々盛んとなり、入門者の増加に伴い舎棟の必要を痛感するに至つた。依つて安政二年、竹田町の慶順川（現在の白石製材所の所）に学舎を新築し之を広徳舎と称した。此の舎名の額は、京都の上河撲庵先生の筆になつたものである。又舎内に掲げた石田梅巖先生の肖像及び祭具等は藩士鴨宮右衛門、宗源作氏の斡旋による所が多かつた。然るにこの広徳舎落成式の祝賀の意味で、岡藩心学の大恩人である中村先生を、招請の計画を進めてゐる中に、安政三年四月三日、先生は享年五十七才で歿せられたので、舎中のものは声を挙げて、悲歎し落涙したのである。そこでその中村先生の代りに、広島から斯界の権威である栗原如心先生を招いて広徳舎落成の記念講話をなした。

この時も中村徳水先生在世の時と同様に各村から巡講の申込依頼があつた。栗原先生帰国後は、鴨宮右衛門を推薦して、広徳舎の講師とし、後に宗六翁　阿南与平次、佐藤龍次、後藤友三郎等も逐次、京都の明倫舎（石田学祖の第一弟子手島堵庵の創立せしもの）より講師の称号を授けられたのである。明治維新となつて、同六年三月心学は政令に依つて、神道に改組され随つて講師は教導職と呼ばれる事となつた。この教導職に補せられた人は、宗六翁、阿南与平次、佐藤龍次、上田安周、淵野桂仙、後藤友三郎等である。然し政令改組後は生徒も漸次減じ、それに小学校令や学制が明治五年頒布されたから心学は衰微の一途を辿るの止むなきに至つた。

明治十年西南の役で広徳舎は兵火に罹かり、舎棟、祭具、画像、入門譜等は悉く烏有に帰した。そこで広徳舎の門標を丹幸太郎宅に移転した。明治十三年京都に於て、一旦中絶の心学道話再興の許可を得たので、後藤友三郎、丹忠蔵等は、県庁に伺書を差出しその再興の許可を得た。講席を設けて丹氏邸で講話をやつて中に、東京参前舎を中心に多く心学者等は神道大成派に帰属したが、京都の明倫舎は之に反対した。此の時、我広徳舎は京都派と行動を共にする線を、打ち出して、明治廿五年まで、ともかく存続した。我が郷土に心学が移された嘉永二年から、明治二十五年迄約四十三年間で、庶民教育の面で大きな業績を遺したと云い得るであろう。

以上述べた人物中、服部小平次は同学の移入に功績があり、鴨宮右衛門は郷人講師の筆頭として、企画のすあり、宗六翁は入門に慎重さを極め初めは批判的の態度であつたが一度入門を決すると熱情的信念で講話に挺身され、多くの著書も出した程でその所謂道歌なるものは有名で後に初代の直入郡長にもなつた。又講師となつた人で淵野桂仙の如き画家の存在も極めて異彩である。

郷土史話

歴史上の流行

豊後地方に「ばさら」といい、「ばさらい」・「ばーされー」などいう言葉がある。本来は乱れた貌を意味するが転じて大変なとも途方もないという形容詞や副詞にも用いられている。これは元来「婆娑羅」と書き、建武中興時代の流行であり、流行語であつた。建武年間記の二条河原落書に「ハサラ扇ノ五骨」と見え、北条氏を倒した天皇方の地方武士が、太刀より大きな刀を差し大骨の鉄扇を持ち、場違いな田舎の粗放さに、無教養に京風を取り入れた華美な出立で、誇らし気に京都をそぞろ歩く姿が揶揄されている。繊細な京風は戦争によつて田舎武士の粗野無感覚な服装言動に塗り替えられた。奇をてらうそうした異形な姿は、武士にとつては力の誇示であり、伊達姿でもあつた。まさしくアプレの流行である。「婆娑羅」は仏教十二神将の一つである娑婆羅大将の異形から起つたものであろう。建武年間の世相は、アプレの点で現在と非常によく似ている。落書には「夜討強盗謀論旨」とも見える。大津なにがしのような、「ばされ―こつう(事)」する者は、今だけではなかつたとみえる。